広島経済大学研究論集
第21巻第2・3号　1998年12月

進化論の意味をめぐる闘い

山　本　貴　裕

はじめに

アメリカでは1920年代と1960年代以降の二度にわたり反進化論運動が展開され，多数のアメリカ人の支持を受けてきた。1991年に行われたギャロップ調査によれば，今でも47%のアメリカ人（大学卒でも4分の1）は「神がこの1万年のある時点で人間をほぼ現在の形に造った」と信じている。また，アーカンソー州とルイジアナ州では1980年代前半に，公立学校において「創造科学」(creation science) と「進化科学」(evolution science) を同じ時間用いて教えることを義務づける法律が通過した。後に裁判所はこれらの法律は違憲であるとの判断を下したが，反進化論運動は1990年代に入っても全く衰えをみせていない。(1)

現在，進化論支持者や一般の人々の多くは，反進化論運動と言えば即「地球は若く（約6千～1万歳）6日間で造られたとする聖書直解主義」(young earth, six-day biblical literalism) として狭く定義する傾向にあるが，実はこの極端な見解は反進化論運動の歴史においては比較的新しいものである。科学史家ロナルド・L・ナンバーズ (Ronald L. Numbers) によれば，19世紀後半から20世紀前半にかけての反進化論者の大半は「若い地球説」の支持者ではなかった。例えば，意外にも，1920年代前半の反進化論運動を率いたウィリアム・ジェニングス・ブライアン (William Jennings Bryan) (1860–1925) は，1925年テネシー州デイトンで開かれた「スコープス裁判」(Scopes Trial) において，不可知論者クラレンス・ダロウ (Clarence Darrow) (1857–1938) に「あなたは地球は6日で造られたと思うか」と尋問された際，「1日24時間の6日ではない」とか「それは何百万年かかかったかもしれない」と答えている。また，ブライアンと同時代の他のファンダメンタリズム指導者の間にも「若い地球」の支持者はほとんど見当たらない。(2)

(1) Ronald L. Numbers, *The Creationists: The Evolution of Scientific Creationism* (Berkeley: Univ. of California, 1992), ix.

(2) 世紀転換期の一般キリスト教徒の大半は，欽定訳聖書の注釈にある大主教アッシャー (Ussher)

（次頁へ続く）

ナンバーズの研究により，20年代の反進化論者のほとんどが地球の年齢に固執していなかったという事実が明らかにされた。とすれば，彼らはいったい進化論の何を問題と考えていたのだろうか。森孝一氏によれば，ブライアンにとって進化論とはダーウィンの生物進化についての理論「ではなく」，ハーバート・スペンサーやウィリアム・サムナーらの社会進化思想「であった」。ブライアンは，「社会進化思想の『適者生存』の論理が，国内においては独占企業の自己正当化の哲学となり，国際問題としてはドイツのアーリア民族至上主義に大義をあたえ，第一次世界大戦を引き起こしたと考えたのである」。森氏はまた，ブライアンにとっての進化論「論争」の意味について，それは宗教か科学かという次元の問題「ではなく」，人間理解・歴史理解についての二つの異なる哲学の間の対立「であった」と述べている。[(3)] 森氏の主張は，ブライアンが生物学の理論としての進化論そのものよりも，進化論に基づく哲学的含意の方を問題視していたという意味においては正しいが，その反面，生物進化と社会進化の間に線を引いたり，進化論論争における宗教と科学の対立という側面を否定することによって，進化論が提起した諸問題のつながりや広がりを見えにくくする傾向にある。

実際には，ブライアンの反進化論的出版物のかなりの部分は，生物進化の証拠とされているものの反証に充てられているし，また，彼は宗教と「真の」科学とは矛盾しないと考えていたものの，その一方で進化論と神とが矛盾することを危惧していたというのも事実である。[(4)] このように，ブライアンをはじめとする1920年代のファンダメンタリストにとって進化論とは，生物進化である「と同時に」社会進化でもあった。また，進化論論争とは，キリスト教という宗教と進化論科学の対立である「と同時に」，各々に基づく二つの異なった哲学の対立でもあった。彼らはこれらの多様な問題のつながりを見取り，進化論とは単なる生物進化の概念に留まらず，

による解釈，すなわち，地球は紀元前4004年に6日で造られたという「若い地球」説を信じていたと思われるが，当時の主要なファンダメンタリストのほとんどは，創世紀において神の天地創造にかかったとされている「日数」(days) を地球の歴史における「時代数」(ages) として解釈する「デイ・エイジ説」(day-age theory) か，創世紀1第1章第1節を第2節から始まる文字通り6日の天地創造の過程から切り離し，その間に幾度かの崩壊と創造が起ったと解釈する「ギャップ説」(gap theory) の何れかを採択した。Ibid., chapters 1－5。

(3) 森　孝一『宗教からよむ「アメリカ」』(講談社，1996年)，195－96。

(4) ブライアンは，William Jennings Bryan, *Seven Questions in Dispute* (New York: Fleming H. Revell Co., 1924) の「人間の起源」を扱った章において，生物進化の証拠とされているものについての反証に紙面の約半分を，また，彼の死後出版された反進化論的出版物 Bryan, *The Last Message of William Jennings Bryan* (New York: Fleming H. Revell Co., 1925) においてもその5分の1を割いている。神と進化論が矛盾することへの彼の危惧については，以下で詳しく取り扱う。

包括的な世界観または哲学を形成しており，それはほぼ必然的に宗教の否定や道徳の崩壊へとつながり，延いては社会や文明の崩壊を引き起こす，という切実な危機感を抱いていた。

進化論と宗教，道徳，社会・文明という次元がつながっているという認識こそ，彼らを反進化論運動へと駆り立てた最大の要因であった。興味深いことに，彼らのこうした危機感は，同時代の世俗的知識人ジョセフ・ウッド・クラッチ (Joseph Wood Krutch) や，30年代に「新正統主義」(neo-orthodoxy) と呼ばれる神学運動の中心的人物になるラインホールド・ニーバー (Reinhold Niebuhr) 等によっても共有されていた。このことからしても，彼らの危機感を単に狂信者特有の「パラノイア」として片付けることはできない。(5)

本稿では，20年代の反進化論者や彼らを支持した多くのアメリカ人の視点に立ったとき，進化論と宗教，道徳，社会・文明がどのようなつながりの内に捉えられたのかという問題を掘り下げてみたい。さらにこの点に関する彼らの見解と彼らの批判者の見解との比較により，当時のアメリカ社会で進化論をめぐり展開された世界観・価値観の闘いの全体像に迫り，この闘いの結果，現代アメリカ人がどのような現実規定の下に置かれたのかを考えてみたい。

1．ブライアンによる進化論的世界観

1920年代の進化論論争のクライマックスとなったスコープス裁判では当初，被告人ジョン・スコープス (John Scopes) がテネシー州の反進化論法に反して公立高校で進化論を教えたか否かが争点となるはずであった。しかし，弁護人クラレンス・ダロウの策略により，議論の中心は，聖書は本当に文字通り正しいのか否か，特に，地球は創世紀にあるように紀元前約4千年に文字通り6日で造られたのか否かという問題へと逸らされていった。こうして聖書直解主義をめぐる両者の攻防がスコープス裁判最大の見せ場となったが，これはブライアンの思惑とは全く異なるものであった。彼はそもそも厳密な意味での聖書直解主義者ではなく，聖書直解主義の擁護のためにこの裁判を闘ったわけでもなかった。ブライアンは裁判の最終日に，最

(5) ファンダメンタリズムを古い秩序の消滅に付随する一時的な異常現象として捉え，それを田舎の無知や非寛容さと結び付ける一般的解釈は，1920年代にファンダメンタリズムを批判した者たちによって形成された。第二次世界大戦後にマッカーシズムが起ると，リチャード・ホッフスタッターを始めとする歴史家は，反知性主義のルーツを20年代のファンダメンタリズムの中に求めた。こうして20年代以来のファンダメンタリスト観は次の世代へと受け継がれたが，1960年代以降，この解釈は歴史家による批判に晒されている。George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture: The Shaping of Twentieth-Century Evangelicalism, 1870–1925* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1980), 199–201.

終陳述の形で自分の本意を述べるつもりであったが，その日になって弁護人ダロウーが被告スコープスの有罪を突如として認め，裁判の幕を引いてしまったため，ブライアンは発言の機会を完全に逸してしまった。[6]

ブライアンは裁判の数日後に息を引き取るが，彼の死後，彼が当裁判のクライマックスで行うはずであった最終陳述が *The Last Message of William Jennings Bryan*（以下，LM と略記）として出版された。LM の出版に当たってブライアンは「これは私の生涯の仕事における最大の山場である」と述べているが，[7] 彼がそこまで重視していたにもかかわらず，裁判で述べることのできなかった彼の真意とはいったい何であったのか。本章では LM を考察の中心に据えつつ，ブライアンが進化論に反対した本当の理由を探ってみることにしよう。[8]

まず，ブライアンにとって「進化」とは何を意味していたのだろうか。LM の最初の部分で彼はこの点を詳しく議論しているが，[9] 同じことが前年に出版された *Seven Questions in Dispute*（以下，SQD と略記）の最終章「人間の起源」においてより簡潔にまとめられているので，ここでは後者を参照すると，「現在の宗教的論争」における進化とは，「動植物界のあらゆる生物が他のすべての生物と直接的あるいは間接的に血縁関係にあること」である。彼には進化という言葉は「軽々しく扱えない」という認識があった。なぜなら，それは「単なる仮説にすぎないとはいえ，その一方で明確なシステムをなしている」ことも事実であり，この「システム」または「世界観」(world scheme) を受け入れれば，人間は「人間より下の世界」と血縁関係の内に結び付けられてしまうからであった。[10]

具体的に言えば，この進化論的世界観が宗教や道徳，延いては社会・文明に及ぼす影響をブライアンは危惧していた。LM においてブライアンが進化論への反対理由として筆頭に挙げたのは，それが「人類創造に関する聖書の説明の真実性に意義を唱え，神の言としての聖書への信仰を揺さぶる」というものであった。[11] SQD に

---

(6) スコープ裁判がブライアンの目論見と違った方向へ進んで行ったことについては，森孝一『宗教からよむ「アメリカ」』，195–97；森「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」『キリスト教研究』第46巻第2号（1985），226–28. を参照。当裁判における地球の年齢をめぐるブライアンとダロウのやり取りの詳しい分析については，拙稿「1920年代アメリカの進化論論争を振り返って—二つのドグマの衝突」『広島経済大学研究論集』第20巻第3号（1997），52–4. を参照。

(7) Bryan, *The Last Message*, 9.

(8) 以下のブライアンによる進化論批判は，森『宗教からよむ「アメリカ」』，199–200. において断片的に取り扱われているが，本稿ではその体系化を試みる。

(9) Bryan, *The Last Message*, 24–26.

(10) Bryan, *Seven Questions*, 125–28.

(11) Bryan, *The Last Message*, 31.

おいて彼はこの点に関してさらに詳しく次のように述べている。進化論によれば，人間は「創造主によって特別に造られたのではなく，下等な生命体の直系である」とされ，進化論に矛盾する聖書は「偽り」であると非難される。また，キリストの神性や処女降誕，肉体的復活等の「超自然的」(supernatural) または「奇蹟的」(miraculous) 現象は，万事を自然法の下に置く進化論と矛盾するので否定される。さらに，人類は生命発展の過程を常に上昇してきたと教える進化論は，人間の「堕落」(fall) を否定することで，救世主キリストの血による人類の罪の贖いを無意味にする。このようにして「進化論者は聖書からすべての権威を奪い去り，それをただの『一枚の紙切れ』にしてしまう」[12]。

進化論と聖書が矛盾すること以上にブライアンが強調したのが，進化論を論理的に突き詰めると無神論になるという点であった。彼によれば，進化論を受け入れると「不可避的ではないにせよ自然な傾向」として，「まず不可知論へ，そして次には無神論へ」と導かれる。ブライアンはその典型的な例として，ダーウィン本人が経験した宗教観の変化に言及した。ダーウィンの息子の書いた伝記によれば，ダーウィンは『種の起源』を書いた後，万物の始まりについて人間は何も知ることができないと考えるようになった。もし「人間の知性が最も下等な動物がもっていた程度の低い知性から発展してきた」のであれば，その知性が万物の始まりについて「壮大な結論を引き出したとしても，それを信じることができようか」。ブライアンはこのように述べ，進化論がダーウィン自身に与えた宗教的影響について語ることのない教師や牧師の不誠実さを批判した[13]。

ブライアンの見解では，進化論の「論理上必然的な影響」は「正統派キリスト教」または「単なるキリスト教」への攻撃というよりもさらに深刻で，それは「宗教」そのものへの攻撃であった。進化論によって宗教が否定されるとすれば，それは当然，宗教の扱う魂にも影響を与えることになるが，魂が永遠不滅であるとすれば，進化論の及ぼす影響は現世に留まらず未来永劫にまで及ぶことになり，その本当の影響は計り知れない。ブライアンの危惧は，ブリンモア大学の心理学者ジェイムズ・ルーバ (James Leuba) が *Belief in God and Immortality* の中で発表した調査結果によっても裏付けられた。ルーバの調査によると，著名な科学者の半数以上は人格神の存在や霊魂の不滅を信じておらず，とりわけ生物学者の間では前者を信じている者の割合は31%以下であり，後者を信じる者も37%に過ぎない。また，有名

(12) Bryan, *Seven Questions in Dispute*, 149–51.

(13) Bryan, *The Last Message*, 31–36；ブライアンはダーウィンの宗教観の変化を表わすダーウィン本人の告白にしばしば言及した。Bryan, "God and Evolution," *New York Times* (February 26, 1922): 5; Bryan, *Seven Questions in Dispute*, 144–46.

大学の学生の間でキリスト教の信仰を捨て去る者の割合が，1年次の15%から3年次では30%に，そして卒業時には40～45%へと学年と共に増加することが報告された。この調査は進化論そのものには言及していないものの，進化論が与える宗教的影響の証拠としてブライアンによってしばしば引き合いに出された。[14]

ブライアンはまた，進化論の宗教的影響と並んで，その道徳的影響についても憂慮していた。後者を示す例としてブライアンは，クラレンス・ダロウがスコープス裁判の前年に扱ったある有名な事件のことを取り上げた。この事件では二人の優秀な大学生が完全犯罪を犯すという知的実験のためにある少年を殺した罪で裁判にかけられた。ブライアンがこの事件に着目したのは，容疑者の一人，ネイサン・レオポルド (Nathan Leopold) が進化論者であり，かつ無神論者であったからであり，また，ダロウがレオポルドの共犯者リチャード・ロエブ (Richard Loeb) に関して次のように言ったからであった。「彼を腐敗させた種がどれくらい遠い先祖から来たのか分からない。また，それがディッキー・ロエブに達するまでにどれくらい多くの先祖を通過したかも分からない」。その先祖もすでに死んでおり，しかもそれは何百万年前かの野獣であったということになれば，先祖を責めることもできない。ブライアンは，これこそ「進化論の本質」であり，それを受け入れることはすなわち「責任感を完全に破壊し，世界の道徳に脅威を与える」ことを意味する，と主張した。[15]

ブライアンはさらに，このような進化論を「真剣にとり，人生哲学の基礎に据えれば，愛を消し去り，人間を歯と爪による決死の闘いへと引きずり戻してしまう」と警告する。彼は，ダーウィンが『人間の由来』(*The Descent of Man*) の中で野蛮人と文明人とを対比させている箇所に注目する。ダーウィンによれば，野蛮人は弱肉強食を実行するのに対して，文明人は精神薄弱者や身体障害者や病人のために保護施設を設立するなどして「排除のプロセスを抑制するために最善を尽くす」が，それは「人類の害になる」。医者も「最後の瞬間まですべての人命を救うために全力を尽くす」という点で，また，予防接種も「それをしなければ天然痘に屈したであろう弱い体質の者を何千人も救ってきた」という点で同じである。その一方で「我々は絶望的な者に援助を与えずにはおれない感情をもっている」ことも事実であるが，この同情の本能も元々は，人類が進化の過程で獲得したものである。今や

(14) Bryan, *The Last Message*, 40–43；ルーバの調査への言及は Bryan, *Seven Questions in Dispute*, 147. にもみられる。

(15) Bryan, *The Last Message*, 43–51；レオポルド・ロエブ事件と進化論の関係については W. B. Riley and Henry B. Smith, *Should Evolution Be Taught in Tax Supported Schools? Riley-Smith Debate* (n. p., n. d.), 8. にも言及がみられる。

我々は「たとえ冷酷な理性に強制されたとしても，我々の本質の最も高貴な部分を退廃させることなく」この同情心を抑えることはできない。したがって「我々は，弱者が生き残り彼らの種を増やすことの悪影響を甘んじて受けざるを得ない」。ダーウィンのこうした見解に対してブライアンは，「これ程までに文明を破壊する教義が他にあろうか」と批判する。[16]

ブライアンは「進化論の根本原理としての野蛮性」をさらに裏付けるために，進化論者アルバート・ウィガム (Albert Wiggam) による1920年代のベストセラー *The New Decalogue of Science* (1923) から次のような箇所を引用する。「野蛮主義こそ，人類が全体的に進歩してきた唯一のプロセスであり，文明は人類が全体的に衰退してきた唯一のプロセスである」。こうした進化論者自身の言葉にもかかわらず進化論を受け入れている聖職者は，進化のもつ深い意味に対して無知すぎる，とブライアンは批判した。[17] また彼は，ベンジャミン・キッド (Benjamin Kidd) 著 *The Science of Power* (1918) からの引用により，ダーウィンとニーチェの関係を指摘する。ダーウィンは，世界の進化が「絶え間ない戦争状態における自然選択の産物」であり，「力に基づく純粋に機械的かつ唯物論的なプロセスの結果」であることを示した。このことを「天才の怒りと強烈さをもって述べた」のがニーチェであり，彼はキリスト教を批判して「退化したものの教義」と呼んだり，民主主義を批判して「虚弱者の避難所」と呼んだりした。彼の「超人」(superman) という教義を通してダーウィニズムがドイツ国民に浸透した結果，ドイツの軍国主義が生まれた。[18]

歴史家ジョージ・マーズデン (George Marsden) によれば，1920年代の進化論論争の主要なテーマは「文明の危機」であり，その背景には第一次世界大戦の生々しい記憶があった。アメリカ人は「文明と野蛮主義との戦争」を闘ったばかりであった。ドイツの野蛮主義は「進化論的な『力は正義なり』という超人哲学」の当然の帰結として生まれたが，「同じことがアメリカでも起こり得る」，とファンダメンタリストは警告し，そうすることで人々の支持を取り付けた。[19]

「文明」対「野蛮」というテーマはLMの最後にキリスト教的「愛」対進化論的「力」というテーマとして現われ，そこでブライアンは，テネシー州の反進化論法

(16) Bryan, *The Last Message*, 56–60.

(17) *Ibid.*, 60–62; *The New Decalogue of Science* は Willard B. Gatewood, Jr., ed., *Controversy in the Twenties: Fundamentalism, Modernism, and Evolution* (Nashville: Vanderbilt Univ. Press, 1969), 171–74. に一部抜粋されている。

(18) Bryan, *The Last Message*, 62–63；キッドからの引用は Bryan, *Seven Questions in Dispute*, 146. にもみられる。

(19) Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, 149；マーズデンは前掲書の出版によってファンダメンタリズム研究における第一人者としての地位を築いた。

を廃止することは19世紀前に行われたキリスト処刑の決定に等しいと訴える。「あの歴史的裁判，史上最大の裁判では，ピラト総督により体現された力 (force) が王座を占めていた。その背後には世界の女王，ローマ政府が，そしてローマ政府の背後には大勢のローマ軍がいた。ピラトの前には，愛の伝道者キリストが立っていた。そして力が勝利した」。テネシー州において今「再び力と愛が向き合っている。そしてあなた方は『キリストと共に歩むなら自分は何をすべきか』という問いに答えねばならない」[20]。ブライアンにとって進化論を受け入れるか否かという問題は，アメリカがその一部である西洋文明の基盤がキリスト教的「愛」なのかそれとも「力」なのかという究極の問いを意味するものであった。

ブライアンは進化論と宗教，道徳，社会・文明との間に上のような連関を見取り，それに対して切実なリアリティをもっていたが，他のファンダメンタリストや，ファンダメンタリストの批判者であったモダニストや無神論者はこの点に関してどのように捉えていたのだろう。次章では，ブライアン以外のファンダメンタリストと，彼らの批判者であったモダニストまたは無神論者の見解の比較により，進化論が1920年代のアメリカ人の心中で引き起こした葛藤をより全体的にとらえてみたい。

2．ファンダメンタリスト対モダニスト，ファンダメンタリスト対無神論者

まず，モダニストとファンダメンタリストの見解を比較するために，ニューヨーク市のユニテリアン教会の牧師であり，かつ著名なモダニストでもあったチャールズ・フランシス・ポッター (Charles Francis Potter) と，同じくニューヨーク市のカルバリー・バプテスト教会の牧師であり，かつ全国的に名の通るファンダメンタリストでもあったジョン・ローチ・ストラットン (John Roach Straton) との間で1924年始めに交された討論，「進化対創造」における両者の議論をみてみよう。ポッター・ストラットン論争は1920年代の進化論論争において，1925年のスコープス裁判以前としては最も注目を集めた出来事であった。ストラットンはポッターを評して「自分の本音を語ることを恐れないし，正統派内部に留まるモダニストと違い，言葉を曖昧に使用したり，二重の意味で宗教的言語を用いたりしない徹底したモダニスト」と賞賛しさえした。ストラットンはポッターとの討論により「モダニズムが何であり，その見解がいかに急進的または革命的であるか」を示そうとした[21]。

ストラットンの期待通り，ポッターはモダニスト的見解の論理的帰結を躊躇せず

(20) Bryan, *The Last Message*, 66–69.

(21) *The Battle over the Bible: First in the Series of Fundamentalist-Modernist Debates between Rev. John Roach Straton...and Rev.Charles Francis Potter...* (New York: George H. Doran Co., 1924), vi–vii.

はっきり述べたので，進化論の宗教的意味に関する両者の見解の違いが浮き彫りになった。ポッターは進化論の宗教的含意について言及した際，進化のプロセスに何度か神の干渉を認める他のモダニストを批判して，彼らを「半進化論者」(semi-evolutionists) と呼んだ。彼らの考えによれば，「まず最初にある創造主 (creator) が地球を造り，地球上に生命を導入し，その生命が進化し動物が人間になる時点で，神は再び自らの手をその機構の中に挿入し，何らかの方法で人間に魂を植え付ける」。しかし，彼らが自然の秩序に超自然の出現を認めるのは，彼らが「依然として超越神への信仰を残している」からである。超越神とは換言すれば「宇宙に不在の神」であり，この神はまた「自律した宇宙を造るだけの能力をもたなかった」ことになる。他方，ポッターの信ずる進化論的神とは「始めから進化のプロセスに内在していた」，究極の力をもつ存在であった。「この生命力の上への突き上げのすべては神の顕現であった。あなたと私も神の顕現である。確かに不完全ではあるが，より良きものへと進歩しつつある」。こういった意味において，進化は神と矛盾しないばかりか，それは「我々が持ちうる最上の神の証」である。[22]

これに対してストラットンは，ポッターの「内在神」は自然の中に完全に閉じ込められており，「汎神論的」(Pantheist) であると批判した。ストラットンの信ずる生ける神とは，汎神論的神とは異なり，「内在的であると同時に超越的」である。「エンジニアはエンジンの中に存在し得ない」のと同様，神はこの世「以前」または「以上」のものである。ストラットンはこの討論における真の争点を「創造か進化か」ではなく，「神はいるのかいないのか」であると捉え直した上で，「これら二つの思想体系の間に妥協の可能性は全くない」と述べ，「有神論的」(theistic) または「キリスト教的」進化論の可能性を否定した。[23]

ストラットンはブライアンと同様，進化論とドイツ軍国主義との関係にも言及した後，進化論の影響がドイツに留まらず，戦後のアメリカ社会における道徳的変化にも現われていると指摘した。「もし我々が高度に発展した野獣にすぎないのであれば，野獣のように生きてはならない理由などない。猿人間には猿の道徳しか作れない！進化論という野蛮な哲学による精神より肉体の賛美，そして理想主義より獣欲主義の賛美が，現在の道徳的腐敗を引き起こしている真因である」。[24]

ストラットンの反論の最後は，「進化論哲学の二つの大きな根本的誤謬」の批判に当てられた。進化論哲学の根本的誤謬の一つは，「ありとあらゆるものは常に

(22) *Evolution versus Creation: Second in the Series of Fundamentalist-Modernist Debates between Rev. John Roach Straton...and Rev.Charles Francis Potter...* (New York: George H. Doran Co., 1924), 27–29.
(23) *Ibid.*, 33–35.
(24) *Ibid.*, 105–07.

『流動と変化』の状態にある」という概念である。この誤った考え方のために，「不動・不変の道徳的基準はないとされ，ゆえにモーセの十戒は軽々しく捨て去られ，今日の若者は自分たちの好きにすべく放任される」。しかし実際には，物理や化学の法則，倫理的原則，神の言のように「絶対に変わらないものも多く存在する」。進化論者が自らの見解を正当化するために持ち出す「自然法」にしても，彼らにとってそれは同じく不変のものである。[25]

いま一つは，進化論によれば「抗争や闘争が世の常である」とされるが，それとは「もう一つ別のより偉大で高次の真理」が存在する。それは，「協力と助け合い，そして他に仕える自己犠牲の事実」である。自分の食物や生命を犠牲にしてまで子供のために闘う親鳥はその一例である。「世界の核心にある優しさ」はキリストが自ら十字架にかかることによって示した「神は愛である」という「人類が知る限りで最も高貴な真理」の中に表わされている。現在必要なのは「十字架の哲学」であって「野蛮な生存競争の哲学」ではない。後者は「利己の極致であり，またあらゆる戦争や不道徳，憎しみと誤りの産みの母」である。[26] このように，ストラットンもブライアンと同様，進化論という生物学上の仮説を一つの明確な世界観・哲学と結び付けて考え，それがキリスト教的世界観・哲学とは真っ向から対立するものであると考えていたことがわかる。

次に，ファンダメンタリストと無神論者の進化論解釈を比較するために，1928年アーカンソー州において WCFA (World's Christian Fundamentals Association) のウィリアム・ベル・ライリー (William Bell Riley) と「全米無神論振興会」(American Association for the Advancement of Atheism) のチャールズ・スミス (Charles Smith) との間で開かれた討論をみてみよう。この討論は，同州における反進化論法制定に関する住民投票を目前にして行われたものであった。片やファンダメンタリスト，片や無神論者という対照的な立場をとる両者であったが，「ダーウィニズムは無神論である」ということに関しては彼らは見解の一致をみた。彼らは時として自分の論敵よりも，進化論と神を両立させようとするモダニストまたは有神論的進化論者の方を激しく攻撃した。[27]

---

(25) *Ibid.*, 108–08.

(26) *Ibid.*, 108–09.

(27) Riley and Smith, *Should Evolution Be Taught*；ブライアンも無神論的進化論者以上に有神論的進化論者を批判した。彼は「私の闘いは不可知論者や無神論者とのものではなく」，「キリスト教会内のいわゆる『モダニスト』とのものである」と述べている。Bryan, *The Last Message*, 10；ブライアンはまた有神論的進化論を評して「キリスト者の宗教が取り去られる間の痛みを消す麻酔」のようなものであると批判した。Bryan, *Seven Questions*, 128.

ライリーによれば，進化論は無神論であり，それを受け入れたモダニズムはキリスト教信仰の形としての根拠を全くもたないとされた。進化論は科学ではなく「無神論者の宗教，そして野蛮性を生む野蛮な教義」であり，「わが国の刑務所を学校に通う年頃の若い男子で満たし，売春宿を十代の若い女子で満たし，この国を強盗で満たし，ひいては世界を戦争で満たしている元凶は，この教義である」。ライリーはまた，神や聖書の否定はあらゆる道徳の消滅を意味すると述べ，「アメリカでは進化論が社会を腐らせている。もしそれが我々の子供たちに教え続けられたなら，それは国家を破滅の運命へと向かわせるだろう」と警告した。[28]

他方，無神論者スミスは，進化論を受け入れながら神への信仰を捨てないでいる多くの科学者たちを批判した。「なぜ進化の含意をこのように避けるのだ。アメリカの科学者たちは聖職者に媚びへつらわねばならないほど意気地がないのか」。天文学における引力説や物理学におけるエネルギーの法則，化学における原子理論が諸々の科学から超自然的要素を取り去った後も，西洋の科学者の大半は，生命の起源やその環境への絶妙な適応といった究極の問題は神を引き合いに出すことなしには説明できないと考えていた。しかし，ダーウィンが打ち出した自然選択説によってこういった問題も神抜きで説明できるようになった。つまり，進化論の自然選択説は，神や超自然の最後の砦であった生物学からも「神を追放する」。したがって，「進化論は無神論である。それは自然法をもって超自然的知性の代わりとした」。スミスはまた，ブライアンと同様，進化論が人間の祖先を猿とすることで，聖書の説く原罪や贖罪の概念を無効にしてしまったことを指摘し，「不誠実なモダニスト」を次のように非難する。「神の言としての聖書を拒否した後でも無神論に至らないのは，その人の偽善の成せる業である。ほとんどのモダニストは隠れた無神論者である」。進化論と神を両立させようとする者たちは，神を必死で救おうとするあまり，「言葉の意味をねじ曲げ，事実を無視し，論理を忘れる」。「進化による創造」という言葉は全く「無意味」であり，このような言葉の乱用は彼らが「愚か者か詐欺師かの何れか」である何よりの証拠である。「偽善の歴史において，科学と宗教を和解させようするこれらの試み以上に暗澹たる記録は存在しない」。[29]

---

(28) Riley and Smith, *Should Evolution Be Taught*, 7–8；ライリーは，Riley, "The Theory of Evolution: Does It Tend to Atheism?" *Christian Fundamentals in School and Church 4* (April-June 1922): 14–21. においても進化論と無神論との関係について扱い，ブライアンやストラットンと同様の議論を展開している。道徳や文明の崩壊というテーマに関しては，Riley, "The Theory of Evolution: Does It Tend to Anarchy?" *Christian Fundamentals in School and Church 4* (July-September 1922): 36–42. が詳しい。

(29) 次頁へ掲載。

スミスは自然選択と神の概念が相容れないことを強調した。自然選択説によれば，集団内の個体は生まれつき少しずつ異なっており，こうしたランダムな変異に対して自然はより環境に適したものを選択するように作用し，選ばれたものは子孫を多く残す。長い時間がたつと，その有利な形質は集団全体に広がり，種の平均的な性質も変化する。そうした小さな変化が積み重なった結果，大きな変化が生まれ，新しい種が現われる。重要なことは，個体の変異は本質的にランダムであるため，変異そのものが進化をある特定の方向へと進めて行くことはできないという点であった。それは，進化のプロセスをある特定の方向に導く存在としての神という形での進化論とキリスト教の伝統的和解方法を否定する唯物論的帰結を伴うものであった。ただし，当時の科学者のほとんどは進化の「事実」については全く疑っていなかったが，具体的な進化の「メカニズム」となると意見が分かれており，中には進化の過程に一定の方向性を認める非ダーウィン的説明も存在した。自然選択説は1870年代，80年代には進化論と同義語であったが，1900年までにはその他の説に取って代わられ，「ダーウィニズムのたそがれ」の時代を向かえた。しかし，1920年代になるとそれは再び生物学の分野において復活を始めていた。[30]

スミスは進化論を自然選択説と同一視し，神と進化を和解させようとしたモダニストを批判する。モダニストは追い詰められた挙句，創世紀に基づく創造説に比して進化論の方が「より高貴で偉大な手法」であると主張するが，「もし神の目的が完璧な存在を造ることであるとすれば，なぜ夥しい数の実験をする必要があったのだろう。当てずっぽうの進化による遅々とした世界創造の方が瞬時の創造よりも高貴な手法であるというのは愚かな信念である」。「進化の核心」は「不適者殺し」であり，このようなプロセスの背後に神がいるとすれば，それは「過去の神学上の発明の中でも最も強力で卑劣な悪魔を作り出す」ことになる。ダーウィンは『種の起源』の末尾で，始めに単数または複数の原形に生命を吹き込んだ「創造主」の存在を認めているが，後に旧訳聖書的な「創造」という語を使ったことへの後悔を述べているではないか。たしかにダーウィンは「無神論者」と呼ばれるより「不可知論

---

(29) Riley and Smith, *Should Evolution Be Taught*, 14–15；ダーウィンの進化論の重大さは，一つの種が別の種へと漸次変化していく過程を説明する信憑性のあるメカニズム，すなわち自然選択説を初めて示すことにより，神の概念を不必要なものにしたことであった。James Turner, *Without God, Without Creed: The Origin of Unbelief in America* (Baltimore: Johns Hopkins Univ. Press, 1985), 179–87.

(30) 科学界における自然選択説の受容度の変化に関しては以下を参照。Edward J. Larson, *Summer for the Gods: The Scopes Trial and America's Continuing Debate Over Science and Religion* (New York: BasicBooks, 1997), 16–26；ピーター・J・ボウラー，横山輝雄訳『チャールズ・ダーウィン　生涯・学説・その影響』（朝日新聞社，1997年），264–76.

者」と呼ばれる方を好んだが，ブリタニカ百科事典によれば「不可知論者とは無神論者と同義語である。彼には神などいなかった」[31]。

スミスは自らの主張の最後に，進化論の「最高の栄光」は「人類の改良の仕方を示したこと」である，と宣言した。「それがたとえ非道徳的だとしても，その原則は人類向上のための可能な限りで最も偉大な原動力となるであろう」。スミスによれば，子供は「神からの贈り物」ではなく，「その性格を予め決定した生殖細胞に由来する。自然に任せておけば排除されるであろう心身の弱さが，現在，各世代ごとに次第に多くの人々へと伝えられている」。この「害悪」を和らげるためにスミスは「出産制限」を提案する。彼にとって，「癲癇症者や聾唖者の結婚防止にさえ反対する」カトリック教会は「人類究極の敵」であった[32]。

アメリカの進化生物学者の多くは今世紀初頭に「優生学」(eugenics) を受け入れたが，優生学的見地から出産制限を課するための公的運動は，反進化論運動と同じく1920年代に最盛期を向かえた。優生学は反進化論者の攻撃の的となった[33]。それは彼らの見解では，また優生学者スミス自身の見解によっても，進化論の論理的帰結であった。それに対して反進化論者ライリーは，優生学の基盤となっている自然選択は自然界には存在しない，と反論した。「適者は必ずしも生き残らない。この世にかつて出現した最大かつ最上の動物たちはすべて死に絶え土に埋っている」。その一方で，鼠や兎などの弱者は人間を困らせるほどの大変な繁殖ぶりである。人間の世界でも同じことが言え，例えば「戦争は常に最も勇敢で最も優れた者の死を，そして『落ちこぼれ，酔っ払い，放蕩者，乞食』の生存を意味してきた」[34]。また，スミスの優生学を正当化する議論は「家庭を破壊し，子供を牛や豚のように繁殖させよというアピール」である。スミスは「たとえそれが非道徳的だとしても」と言ったが，「それがどうして非道徳的でありえようか」。「神がいないなら，十戒は拘束力をもたない。もし聖書が本当でないなら，道徳の基盤はない。進化論者にとって唯一可能な道徳は結果の道徳である。彼らの原則に従えば，どんな非道でもそれが適者生存という結果を生むならば許される」。この教義を遂行すれば，「ドイツが試みたように，強い国家によって弱い国家が地球上から抹殺されてしまうだろう」。ライリーは反論のクライマックスの部分でアーカンソー州の親に向けて，もし自分の子供に「神を信じ，道徳的行動の基盤として十戒を受け入れ，思慮をもって仲間

---

(31) Riley and Smith, *Should Evolution Be Taught*, 15, 18.
(32) *Ibid.*, 18.
(33) Larson, *Summer for the Gods*, 27–28.
(34) Riley and Smith, *Should Evolution Be Taught*, 19–20.

を扱い，まともな文明に貢献させたいなら，反進化論法へ投票せよ」と訴えた。[35]

他方，スミスは進化論的道徳観を弁護して次のように反論する。道徳とは「サバイバルに役立つ社会的特質や良い習慣」のことである。ライリーによる演説の「ヒステリックな結末部分」で「神なしに人は善良たり得ないという聖職者のドグマ」が持ち出されたが，このドグマが嘘であることは，進化論が法律で禁じられているテネシー州メンフィスで人口当たりの犯罪率が全米一高いという事実等によっても証明される。逆に，宗教と犯罪は密接な関係にある。例えば，時として聖書を真剣にとりエホバに人間の生贄を捧げる「愚か者」(some half-wit) がいるではないか。また，進化論は家庭を破壊するというライリーの非難にしても，進化論者は家庭を「社会的必要」とみなしているという事実と矛盾する。スミスは反論の最後に，「進化論は真実であり，その教育は良い結果を生み出す。もしあなたがアーカンソーを愛し，自州が世界の人々の嘲笑の的になって欲しくなければ，もし自州の住民を宗教の束縛から解放したければ，モンキー法案を葬り去れ」と訴えた。[36]

以上，ブライアン以外のファンダメンタリストとモダニスト，無神論者の目を通して見た進化論の世界を考察してきたが，いずれの場合にも進化論の受容は実際に宗教的・道徳的帰結を伴うものとして意識されていた。また，進化論を受け入れるか否かという問題は，究極的には，アメリカ社会や西洋文明全体がこれから先どのような哲学に基づき，どのような方向へ進むべきかという重大な問題とつながっていた。

おわりに

1925年のスコープス裁判では弁護人クラレンス・ダロウの策略により，ブライアンが最も訴えたかった点，すなわち，進化論が宗教，道徳，社会・文明に及ぼす影響については一度も議論されることなく，地球が文字通り6日で造られたのかどうかという些細な問題に注意が集中した。その些細な問題につまずいたがために，ファンダメンタリズムやそれが支持した創造説は，知的信用を完全に失ってしまった。

しかし，進化論の含意に関するファンダメンタリストの見解は意外な方面から共感者を得ることになった。同時代の世俗的知識人ジョセフ・ウッド・クラッチは *The Modern Temper* (1929) の中で，西洋文明の基盤を成してきた宗教的信条や道徳的基準が生物学や心理学に代表される科学によって幻想にしか過ぎなかったことを暴露され，その文明は人間そのものに対する信仰の喪失により崩壊の危機に瀕し

(35) *Ibid.*, 22–23.
(36) *Ibid.*, 25.

ていると論じた。ここで言及されている生物学とはダーウィンの進化論のことであり，彼が見た進化論の示す世界観とは，ファンダメンタリストの見解と同じものであった。[37] また，30年代に新正統主義の立場からモダニズム批判を展開したラインホールド・ニーバーも1926年に同じ問題に関して次のように述べている。「結局，進化のプロセスの中には自由や目的は存在せず，ゆえに道徳も存在しない。自然に顕現した形での神しか知ることができないのであれば，道徳的な神はいない」[38]。クラッチやニーバーの分析によれば，進化論を神や道徳と両立させたモダニストよりも，それらを相矛盾するものとして捉えたファンダメンタリストの方が現実的であった。

結果的にみても，進化論と神を両立させたモダニスト的世界観は一時しのぎの方策に過ぎなかったといえる。1920年代の時点では科学者の間で進化の具体的な「メカニズム」については合意が存在しないという曖昧な状況が存在したがゆえに，進化論とは無神論であるとファンダメンタリストや無神論者が主張したにもかかわらず，モダニストは進化のプロセスの中に神を想定することができた。もしそのメカニズムが自然選択のみであると断定されていたとすれば，進化論は事実上，無神論を意味したが，その他にも，モダニスト的な形での進化と神の調和の余地を残すメカニズムも科学者たちによって提出されていた。しかし，1940年代以降ネオ・ダーウィニズムが台頭し，無神論的な含意をもつ自然選択が進化を説明する最も有力な機構としての地位を獲得するにつれて，モダニストの有神論的進化論は依って立つ科学的根拠を失い，逆に，ファンダメンタリストが恐れ，無神論者が賛美した無神論的進化論は科学的な裏付けを得ることになった。[39] かくして，現代アメリカ人はついに無神論的進化論による現実規定の支配下に置かれることとなったのである。

---

(37) Joseph Wood Krutch, *The Modern Temper* ([1929], San Diego: Harcourt Brace & Co., 1957)；1920年代にファンダメンタリズムと世俗ヒューマニズム (secular humanism) の間に反モダニズムという点において奇妙な知的同盟関係がみられた。両者は，モダニズムはキリスト教ではないという共通見解をもっていた。William R. Hutchison, *The Modernist Impulse in American Protestantism* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1976), 257–87.

(38) Reinhold Niebuhr, "Our Secularized Civilization," *Christian Century*, XLIII (April 22, 1926), in Gatewood, *Controversy in the Twenties*, 98.

(39) 進化論の歴史の研究者ピーター・J・ボウラーは，「ダーウィニズム」という言葉がヴィクトリア時代と現代では異なり，前者においては自然選択説が内包する唯物的帰結は受け入れられなかったが，後者においてそれは完全な受容をみたと指摘する。ボウラー『チャールズ・ダーウィン　生涯・学説・その影響』；現在の代表的ネオ・ダーウィニストの一人，リチャード・ドーキンズは「ダーウィンによってはじめて，知的な意味で首尾一貫した無神論者になることが可能になった」と述べ，ダーウィニズムのもつ無神論的含意について明言している。ドーキンズ，中嶋康裕訳『ブラインド・ウォッチメイカー』(早川書房，1993年)，26.